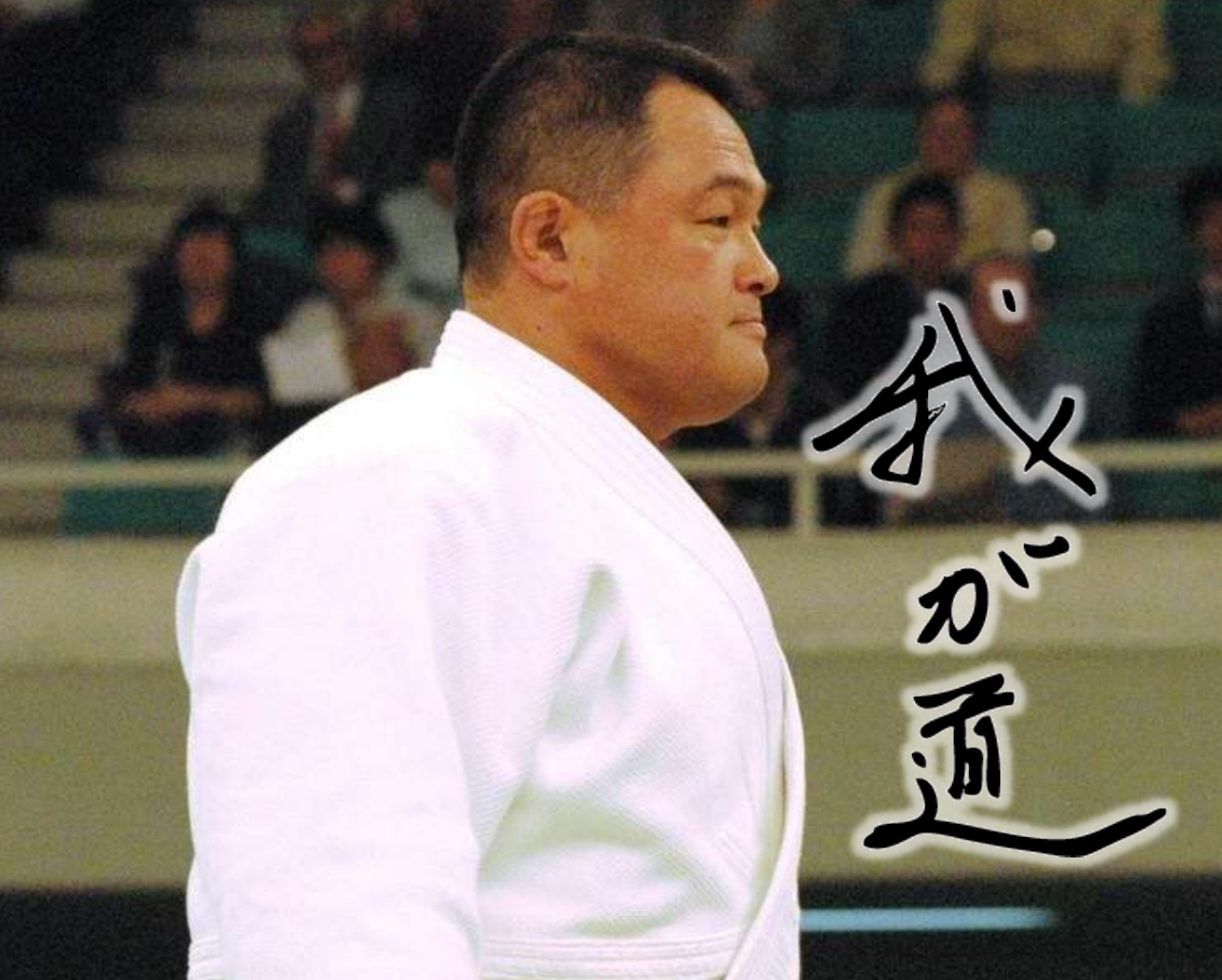




我が道

山本 誠

スポーツニッポン
二〇一一年五月一日〜三一日

プロローグ

第1章 教育者として

嘉納治五郎師範

もっこすじいさん

悪ゴロ

最初の師

2度目の転機

人生の勝利者

佐藤ゼミ

4強

体育学部長

第2章 スポーツの価値

我この道を行く

最後の黒星

松前総長

金メダル

ボイコット

2階級制覇

満月が欠け始めた

暗雲

ラッシュワ

引退

使命

第3章 国際交流と平和

もう一枚の表彰状

ルネッサンス

陰謀

プーチン

柔道の力

連帯

反日の街

和平へ

エピソード 自他共栄

スポーツニッポン

二〇一一年五月一日〜三十一日掲載

株式会社スポーツニッポン新聞社

構成 鈴木 誠治

我が道 1



プロローグ

プロローグ わたしは過去を振り返ることが好きではありません。過去が輝くのはいいことだと思いますが、大事な今は今が輝くこと、これからが輝くことだと思います。

だから、柔道の選手や指導者だった時代の取材や講演の依頼は、なるべく受けないようにしています。わたしは過去に生きていた人間ではなく、今を生きている人かどうかを考えている人間だからです。過去だけでなく、今の山下と、山下が目指しているものを書いてほしい

直筆
い、聞いてほしいとお願
いしているのです。
では、今の山下とは何

か。わたしは現在、3つの肩書を持っています。まずは「東海大理事、体育学部長」。これは、教育者としての肩書です。2つ目は「神奈川県体育

高校1年生でのインターハイ優勝、史上最年少の19歳での全日本選手権優勝、同選手権最多の9連覇。84年ロサンゼルス五輪で金メダルを獲得し、国民栄誉賞もいただきました。公式戦203連勝、対外国人選手無敗のまま85年に引退しました。

柔道の経験はもちろん今のわたしの人生の大きな基礎となっています。しかし、それだけでは「人生の勝利者」にはならないのです。わたしは、人生を5回か6回、生きたいという欲張りな理想を持っています。現役時代のわたしは1回目の人生、指導者の

身を引き、国際柔道連盟理事など、柔道界を外から支えるべく活動に移りました。それが3回目の人生です。

そして今が、柔道だけでなく、より広い視野から教育、スポーツの発展、国際交流と平和のために活動する4回目の人生です。

、9連覇を達成。世界選手
の2階級制覇を含む3連
覇サンゼルス五輪無差別級
など203連勝のまま85年に
、全日本の男子監督も務め

私は今、4回目の人生を生きている



五輪金メダリスト、国民栄
 誉賞など、過去の肩書は
 使わない。忙しくて柔道
 を着る暇もない。スーツ
 で、写真撮影もしている

◆山下 泰裕（やました・やすひろ）1957年（昭32）6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大3年時に19歳10カ月の史上最年少で全日本選手権



第1章 教育者として①
「嘉納治五郎師範」

言葉に代表されるように、「柔の理」を目指す武術でした。嘉納師範は、各派の技術を体系化して柔道を創設したのです。しかし、柔道と柔術には大きな違いがあります。柔術は技術を追求する格闘技ですが、柔道は字のごとく「道」なのです。

「柔道」は、嘉納治五郎師範が1882年（明治15）に創設したものです。それまで、日本には「柔術」しかありませんでした。多くの流派があった柔術は「柔よく剛を制す」の言葉に代表されるように、「柔の理」を目指す武術でした。嘉納師範は、各派の技術を体系化して柔道を創設したのです。しかし、柔道と柔術には大きな違いがあります。柔術は技術を追求する格闘技ですが、柔道は字のごとく「道」なのです。

柔道で培ったものを、人生に生かす。そのために、心身を鍛えるのです。「精力善用」という嘉納師範の言葉があります。心身の力を有効に活用するという意味です。「柔の理」は柔術のみの理論ですが、「精力善用」は、自身の力を社会全般に活用せよという教えです。

忘れてはならない「術」と「道」の意味



嘉納治五郎師範は、近大19代会長として、柔道の発展に貢献した。写真は、嘉納師範の晩年。

東海大学大学院修了後の88年に東海大学柔道部監督になったわたしは自信満々でした。日

会（現日本体育協会）創設などの活動で、「日本体育の父」とも言われています。つまり、柔道家である以上に教育者だったのです。われわれ柔道家は、「術」が「道」に進化した意味を知り、忘れてはならない。そのことを、私は現役引退後に痛感させられました。

ある日、一人の女性が訪ねてきました。息子さんの白血病治療のために、岡山から東海大学に訪ねてきたのだと。わたしは理解できなかったのです。柔道で勝つことだけでは極めることができない。しかし、柔道をしたからこそ学んだ道もある。第1章は、わたしに大きな影響を与えた3人の教えを中心に振り返ります。

海大病院に來たのです。その女性の依頼で、柔道部が血液を提供することになりました。すると、その部員が中心になって献血者を募ったのです。それだけではない。手術後に女性が涙ながらに話すには、彼は何度も見舞いに行き、激励の手紙を書き、応援したという。高校でエースだった彼が、大学で結果を残せずに悩んでいたことを知らず、他人に親身になれる彼のよさも知らず、わたしは「出て行け」と言ったのです。教育者としての未熟さを思い知らされました。

山下 泰裕（やました・やすひろ）1957年（昭和32）6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で全日本選手権初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。

第1章 教育者として②
「もっこすじいさん」

わたしには、頑固一徹、勝手気ままで、何でも一番でないといふが、済まない祖父がいまだ。

山下泰蔵（やました・やすひろ）
す。1902年（明治35）に漁師の子として生まれた祖父は、自分の長男と次女を幼くして亡くしています。わたしの母である長女・優子も、2歳の時に赤痢にかかって医者に見放された経験があります。初孫は丈夫な子に育てたい。その気持ちが強かったのも、当然でした。



直筆

1957年（昭和32）6月1日、わたしは生まれました。泰裕という命名は泰蔵の泰と、昭和天皇の「裕」から一字をいただいたものです。体重3000g、ごく平均的な赤ちゃんでした。

そんな赤ん坊が、1歳

11カ月で熊本県赤ちゃんコンクールで最優秀児となり、6年生の制服を着て小学校に入学し、小5で身長1.68、体重70kgと大きな子供になったのは、祖父の変わった子育ての影響があったのかもしれない。

生まれる前は母にあひるの卵を生で飲ませ、生後30日から毎日、「皮膚が強くなる」と銭湯で体をヘチマで炙り赤になるほどこすっては、冷水を浴びせたそうです。魚の仲間をしていた

待望の孫 ミルク代わりにブグスープ

本学生柔道選手権大会



ため、タイやフグからとったスープをミルク代わりに与える。さらに「骨が強くなる」と刺し身も食べさせた。周囲からはいろいろと言われたようですが、孫が丈夫になるためなら何でもしたようです。典型的な「肥後もっこす」こと言っているでしょう。頑固で

わたくしが東海大学生だったころの祖父・泰蔵。国内、海外問わず、試合会場に必ず和服で応援に駆けつけてくれた

てしまったこともありまし。この時はさすがに「おれを売る気か!」とけんかになりました。時に行きすぎてしまふ祖父でしたが、こんな祖父のDNAが、わたしを世界一にしてくれたと思います。

祖父は、本当は「泰一」と名付けたかったようです。「いか、泰裕、日本一の男になれ」。高い目標のために一筋に突き進む意志と努力。へこたれない根性。何を大事にしたいかにぶれずに生きるか。信念を持って生きることが、教育者となった今、学生に伝えたい大事なことのひとつです。

わたしが生まれると同時に経営していた料理店を閉めた祖父は、すべての情熱をわたしに注ぎました。おかげで文字通り、すくすくと成長しましたが、そのために、少年時代に数々の問題を引き起こすことになりました。

◆山下 泰裕（やました・やすひろ）1957年（昭和32）6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で全日本選手権

初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。

第1章 教育者として③

「悪ゴロ」

子供を「悪ゴロ」と言います。小学校に上がってからも、成績は悪くなかったのですが、内申書がひどい内容でした。自分の子供に見せられないほどです。何でも一番でない気が済まないから、すぐに手が出てしまつた。体格差がありすぎて、ちょっと押したつもりでも、相手は吹っ

飛びます。大人になって、同級生に「多大な迷惑をかけた」と言われたほどでした。小4になると体が横にも広がってききました。肥満です。さらに、わたしのせいで学校に行くのが嫌だと、同級生が登校拒否する事件が起こりました。肥満と素行の悪さを見かね、両親は柔道をやらせることにしたのです。



直筆

柔道始めても素行良くなりず

勝しました。それでも、わたしにとって柔道は遊びの延長です。友だちと一緒に週2回、稽古に通う。試合に勝てばうれしいけど、負け

ん。素行も一向によくなりません。悔しかった記憶はありませんでした。つまり、このころのわたしは、スポーツで最も大事な「フェアプレーの精神」を理解していなかったのです。

いじめはフェアではない。一番になることが、最も大事なのではない。わたしは今、スポーツを通して学ぶフェアプレーの精神の重要性を、教育者として訴えています。しかし、情熱をもって競技に取り組みなければ、それを学ぶことはできないのです。当時のわたしは、まさにそれでした。



浜町小5年の時のクラス写真(最後列左から3人目)。文字通り頭一つ抜けた体格だった

「この子は技を知らないが、大きいのに動きが速い。しかも、いい下半身をしている」熊本市立藤園中柔道部の白石礼介監督でした。藤園中は、県大会9連覇中の屈指の強豪校で、全国大会がない当時でも、日本中に名前を知られていました。5、6年生の時、県大会会場で2度、白石監督にスカウトされました。

わたしの答えは、ノーでした。友だちと地元の浜町中に行く約束をしていたからです。白石監督に自宅まで来ていただいても、藤園中の道場で稽古をしても、気持ちは動きません。両親も藤園中進学には反対でしたが、祖父だけが、熊本市への越境入学を強く勧めました。

それどころか、勝負にすら淡泊だったわたしを、じっと見つめている目がありました。

全日本選手権初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。

山下 泰裕 (やました・やすひろ) 1957年(昭和32)6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で

山下 泰裕 (やました・やすひろ) 1957年(昭和32)6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で

全日本選手権初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。

我が道 5



直筆

第1章 教育者として④
「最初の師」

わたしには、欠くことのできない2人の師がいます。一人は、東海大の佐藤宣哉先生。もう一人が藤園中への入学を熱心に誘ってくださった白石礼介監督です。

この2人は、タイプの違う指導者です。衣料品店の経営者で、教諭ではない白石監督は、「勝負は勝つことがすべて」という職人的な方でした。佐藤先生は「柔道を通して人間形成をする」という教育者でした。

その2人に共通していたのは、柔道への情熱と、弟子への

愛情です。信頼できる師の大きく、温かい胸が常に近くにあったことは、とても幸せなことでした。

さて、結局わたしは祖父・泰蔵の存で藤園中に進学しました。やるなら強くならなければ意味がないと

考えたのでしよう。この白石監督との出会いで、わたしは持ち前の闘争心を強くなることに注ぐようになりました。柔道への情熱が芽生えたのです。

稽古は厳しいものでした。元立ち一本勝負といって、一本勝ちするまで次々に違う相手と乱取りを続ける稽古や、徹底した打ち込み稽古。練習中に吐き、血が混じった赤茶色の尿が出る毎日でした。

この猛稽古で、わたしの柔道の基礎はできるのです。人数が

「勝利がすべて」世界見据えた指導



少ないために有利といわれる左組みに変え、大外刈り、大内刈り、内股など、引退までわたしを支えた得意技を習得します。最重量級ながら、足を使って動き回る「中量級の柔道」を教えられました。

さらに、相手が小柄でも内側から上に突き上げる組み手を叩き込まれたのです。わたしの大きな大柄な選手は、上から相手を押さえつけるのが基本です。これらすべてが、わたしの将来を見据えた指導だったのは、驚きです。「い

つか、おまえより大きな相手と戦う時がくる」と、中学生に世界を見据えた指導をしていたのです。

先見の明というのでしよう。白石監督は、1年生からわたしを団体戦の補欠にするな

監督
藤園中3年で全国大会3連覇を果たし、優勝旗を持って熊本市内をパレード。先頭が白石

ど、特別扱いをしてくれませんでした。強い選手を集中的に鍛えるやり方は、保護者の反発も買ったようです。しかし、選手の個性と将来性を見抜く目、それを伸ばす方法論は非常に的確でした。

東海大監督就任直後のわたしの失敗は、白石流を、中途半端な形で持ち込んでしまったからだと思います。わたしはその後、全日本男子の監督も務めました。五輪金メダル、つまり、勝利がすべての全日本ならば白石流でいいのですが、教育者である学校指導者が勝利に偏ってはためなです。

藤園中では第1回から全国中学大会を3連覇し、無敗のまま卒業しました。ちょうど同時期に白石監督が九州学院柔道部の監督に就任しました。わたしは師を追って九州学院に進学しました。

◇山下 泰裕（やました・やすひろ）1957年（昭和32）6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で全日本選手権

初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。



番外

直筆

両親の話をしたと思います。

父・六男は農家の9人きょうだいの末っ子で、六男だから六男と名付けられました。母・優子と結婚して山下家に婿養子に入った人です。

両親は生鮮食品の仲卸と小売りをしていたため、朝早くから夜まで働き通しでした。祖父・泰蔵がわたしを育てることに熱心だったこともあって、父から言葉で何かを教育された記憶はほとんどありません。

父は寡黙な人でした。祖父のDNAを濃く引く母は気性も激

しく、わんぱくだったわたしを怒るのは、もっぱら母の仕事です。父はうるさいことをあまり言わない人でしたが、コツコツと粘り強く働く姿を見て尊敬していました。

柔道選手として、勝負に生きる者として必要な闘争心と負けず嫌いな性格は、明らかに祖父、母から受け継いだものです。わたしには2人の弟がいいますが、弟たちの分まで受け継いでしまったと思うほどです。

しかし、父が背中であえてくれたことも、わたしにはとても大事なことです。長い年月をかけて粘り強く一つのことを成し遂げる。その父から、よく言われた言葉があります。

「最低限、やるべき勉強はや

最も怖かったのは寡黙な父



っておけ。社会人として将来生きていくためには、勉強が一番、大切だ」

柔道を始めてから、祖父は「勉強では日本一にはなれん。父の言葉をしっかりと聞いて勉強は放っておいても、柔道をやれ。それが日本一への道だ」とよく言いました。それ

を見た父が、わたしの将来を案じて言ったのです。しかし、素行は悪くても、成績が悪いわけではなかったわたしは、父の言葉をしっかりと聞いてはいませんでした。

それが今、わたしは東海大体育学部に入學してくる、スポーツの分野で優秀な力を持つ学生にこう語りかけます。

「目指すのは、目の前の勝利ではなく、人生の勝利である。勉強は人生を通してやるものです。ぜ

でも、その時に素直にそう言える人間でありたいのです。みんないいところも、足りないところもある。欲望やわがままもある。それを認め、許し、その上で少しでも成長する、少しでも社会の役に立つ人間になりたいのです。

祖父と両親の3人で、わたしは最も怖かったのは、寡黙な父でした。父はわたしの将来をじっと見つめ、無言の背中で語りかけてくれていたのだと思います。

◎山下 泰蔵（やました・やすひろ）1957年（昭32）6月1日、熊本県上益城郡生まれの53歳。9歳で柔道を始め、九州学院高で史上初の1年生高校王者。東海大2年時に19歳10カ月の史上最年少で全日本選手権

初優勝し、9連覇を達成。世界選手権は81年の2階級制覇を含む3連覇。84年ロサンゼルス五輪無差別級金メダルなど203連勝のまま85年に引退後は、全日本の男子監督も務めた。

第1章 教育者として⑤
「2度目の転機」

九州学院入学前に白石監督から言われた言葉があります。

「高1でインターハイ優勝、高3で全日本選手権出場」

中学3年間を無敗で過ごし、団体戦で全国3連覇をしたといっても、さすがに雲をつかむような目標でした。でも、白石監督は「おまえならできる」と言います。暗示をかけていたのです。そういう「ツボ」を押さえるのが、上手な監督でした。高1のイン

ターハイは、緊張でガチガチでした。すると、白石監督がわたしの頭をゴツンと叩いたのです。スーッと緊張が抜けました。

励ます。リラックスさせる。気合を入れる。緊張を和らげる方法はいろいろあるでしょうが、あの時のわたしには、ゲンコツが最適だったのです。指導者と選手の呼吸が合っていれば、ツボは効果を発揮するのです。

本来の柔道を取り戻したわたしは、決勝で鹿児島県3年の諏訪剛さんを合わせ技一本で下し、史上初めて、高校1年生での優勝を果たしました。

しかし、2連覇を狙った高2のインターハイは決勝に進めませんでした。個人戦は吉岡剛さん（福

岡・嘉穂）、松井勲さん（岐阜・関）の3年生2人とわたしが、三羽がらすと言われていました。吉岡さんには、前年の金鷲旗で僅差で敗れています。松井さんはこの年、高校生でただ一人、全日本選手権に出場しています。2人とも超高校級の逸材でした。

準決勝の相手は、松井さんでし

た。思い通りの柔道をさせてもらえませんが、結果は判定負け。2人が強いとはいえ、勝てると思ってわたしのショックは、大きいものでありました。

「このままではいけない……」

この敗戦が、わたしに大きな決断をさせます。今、振り返ってもわたしの柔道人生を大きく変えたと言える決断です。



実は前年の12月、わたしは白石監督、祖父・泰蔵とともに、熊本市内で東海大の松前重義総長と柔道部監督の佐藤宣良先生に会っています。高校を卒業後、東海大に来ないかという勧誘でした。

初対面ですが具体的な話はなく、東海大進学を決めたわけでもありませんでした。しかし、松井戦の敗戦が、わたしを大きく動かします。高2のこの時期、前年の3年生が卒業したことで練習相手がいないことも、大きな悩みでした。敗戦当日の夜、大学との一員した指導を受けられる東海大相模高への転校を決断しました。

家族会議を経て東海大関係者へ連絡すると、翌日には九州学院の担任と話し、事務手続きは1週間で終わりました。残ったのはただ一つ、わたし自身がしなければならぬ重要な仕事でした。

高2の敗戦当日に転校決断

山下 隆 (やました たかし) 1957年(昭和32)6月1日、熊本県生まれの53歳。全日本選手権で史上最年少優勝し、9連覇。84年ロサンゼルス五輪金メダル。2003連覇のままだ



第1章 教育者として⑥
「人生の勝利者」

転校を決意してから、わたしは九州学院の道場に顔を出していませんでした。一日も早く、あいさつをしなればいけないのは分かっていた。でも、白石監督や仲間と顔を合わせるの、つらかったのです。やっと道場のドアを開けると、気まずく、暗く、重苦しい空気が流れました。みんな、すでに転校を知っていたのです。白石監督のところに重い足を運びました。「よう来たな」

「先生」

すみませんという言葉が、口から出てきません。

「分かった。もう何も言うな。これで、俺とおまえの縁が切れずにすんだ」

涙ぐみながら、仲間の前にわたしを連れて行った監督は、こう話しました。

「山下は東海大相模に行くことになったが、いいか、これは転校ではない。みんなより一足早く、九州学院を卒業するんだ。だから早く送りだしてやろう」

わたしも仲間も、涙が止まりませんでした。この言葉と、仲間と交わした握手は忘れられません。高2の夏休みのことでした。

このエピソードが、恩師・白石

監督の人間性をよく表していると思います。以前、白石監督の哲学を「勝負は勝つことがすべて」と表現しました。白石監督の言う勝負は、柔道だけではなく、人生の勝利者」になれという教えでした。

わたしは今、柔道を通じた「人づくり」を掲げています。厳しい練習で培った体力、気力、精神力は、その後のわたしを支えてくれました。困難にぶつかった時、解法は常に、汗を流した畳の上での経験の中にあつたのです。

「自分のことを親身に思ってくれる人の話を素直に聞き、心と体を磨け。それを人生に生かしてこそ、柔道の価値がある。柔道で強くなるだけでなく、人生の勝利者」



2003年、九州学院を卒業後、白石監督の指導を受け、柔道を通じて人生の勝利者となった。恩師・白石監督の言葉は、何よりも励みになりました。

最強の選手より最高の柔道家となれ

「最強の選手より、最高の柔道家となれ」

この白石監督の言葉をわたしはそのまま、学生に伝えます。柔道を通じた人間教育が、教育者としてのわたしの目標なのです。

わたしは口癖です。転校が山下のために必要なら、早く送りだそう。山下が人生を前に進めるために決断したのなら、喜んで応援しようじゃないか。わたしの柔道人生の原点となった白石監督の教えは、教育者としてのわたしの原点でもあるのです。

高体連の規約で、転校後6カ月間は公式戦に出場できません。有望選手の引き抜きだと、わたしも東海大も批判を受けました。でも、自分が下した決断を後押ししてくれた恩師の言葉は、何よりも励みになりました。

高体連の規約で、転校後6カ月間は公式戦に出場できません。有望選手の引き抜きだと、わたしも東海大も批判を受けました。でも、自分が下した決断を後押ししてくれた恩師の言葉は、何よりも励みになりました。



第1章 教育者としての「佐藤ゼミ」

熊本・藤園中と九州学院で指導を受けた白石監督が、教育者としてのわたしの原点ならば、東海大相模転校後に指導を受けた佐藤宣義先生は、教育者としての肉付けをしてくれた恩師でした。

東京教育大（現筑波大）から東海大にこられた佐藤先生は、まさに教育者でした。「柔道を通して人間形成をする」との指導理念を持ち、勝負、スポーツ界、大学教育、男の生き方など、幅広い教養を受け

ました。

転校後、佐藤先生の自宅に下宿したわたしは、高校の稽古は週1日だけで残りの週5日は東海大の稽古に参加しました。そのわたしに、佐藤先生は3つの心構えを言い渡しました。①てんぐになるな②ケガをするな③次のチャンスがあると思うな、でした。

この教えは、現役時代の支えでしたが、指導者としての自分にも影響を与えました。92年に全日本男子監督に就任した後の改革が、まさにこの通りだったのです。

①は白石監督の「一人の話を素直に聞け」という教えと同じです。全日本でわたしたちは、栄義、トレーニング、メンタルの専門家をスタッフに招きました。それまで、柔

道出身の専門家に頼ってきた全日本では、異端でした。強化法もスキーやスケートなど他競技の人たちの話を積極的に聞きました。創始国の伝統を破ったのです。

②も伝統打破を生み出しました。ケガをしたら、コーチの許可をとって対処を考えるのが、当時の柔道界でした。稽古中に水を飲むこと

すら、許可が必要だったのです。「自分で考える」と言いました。ケガをしたらどうするかを考えることは、ケガをしないためにどうするかを考えることです。自立がケガを防ぐのです。

③は代表選考法の改革に応用しました。当時は、冬の欧州遠征後の春に代表選考大会の講道館杯、



相模

全日本選抜体重別選手権が行われていました。立て続けに2つのチャン

3つの心構えで全日本改革

スがあるのです。これでは、一つの大会への集中力が養われません。講道館杯を秋開催とし、選抜体重別を最終選考会と位置づけて、選考基準を明確にしました。佐藤先生の教えの特徴は、物事を大きな視点から総合的に考え、常に研究を怠らず、新しいものを積極的に取り入れることでした。3つの心構えを応用し、全日本の改革ができたのも、そのためではないかと考えています。

下宿していた6年間、毎夕食後に開かれた「佐藤ゼミ」で、柔道だけでなく、教育者、社会人として多くのことを吸収しました。そして、公式戦出場停止が明けた高3の春、神奈川県予選を勝ち抜いて初めて、体無差別で日本一を決める全日本選抜体重別の出場権にします。白石監督との約束が実現したのです。

第1章 教育者として⑧
「4強」



わたしの公式戦通算成績は、528勝15分け16敗です。中学入学後から続けた無敗が、高一で途切れるまでが103連勝。大学2年で最後の敗戦をしてから引退までが203連勝。つまり、敗戦は73年から77年の4年間に限られているのですが、中でも75、76年の2年間は13敗を喫しています。

たものでした。

わたしが体重無差別で日本一を決める全日本選手権に初出場したのは、75年、東海大相模3年のときでした。当時、日本柔道界を引っ張っていたのが、二宮和弘、高木長之助、遠藤純男、上村春樹の4人です。全員が世界選手権金メダリスト、二宮、上村さんは五輪の金メダリストでもあります。

この「4強時代」のまっただ中で、わたしは全日本選手権に初出場したのです。75年は準決勝で上村さんに優勢負け。以後、世界選手権予選、五輪予選、全日本選抜体重別選手権などで4強の壁にはね返され続けました。

その間に、わたしは全日本の代表に選ばれてフランス国際で優勝

するなど、着実に経験を積んでい

ました。佐藤先生と二人三脚で、筋力トレーニング、持久力のアップ、技の強化に加え、4強の研究もしたのですが、どうしても4強に勝てませんでした。



しかし、この時期の「勝ちたい」というひたむきな気持ちが、その後わたしを支えたものだと思います。連載の最初に、過去を振り返るのが好きではないという話をしました。それは、守りに入らないということなのです。

わたしは、77年の全日本選手権で上村、遠藤さんに勝って初優勝を果たします。19歳10カ月、史上最年少での優勝は、528勝の中でも最も印象に残っている勝利です。攻め抜いて手にした優勝だったからです。わたしは、それ以

75年全日本選手権準決勝で上村春樹さんに有効を奪われて敗れた。上村さんは現在、講道館館長、全日本柔道連盟会長

攻め続ける強さ教えてくれた壁

後、王者として挑戦を受けるの

ではなく、空位の王座に挑戦する、攻めの気持ちを持ち続けました。「勝ちたい、強くなりしたい」という気持ちを持ち続けたのです。

85年に引退した時、わたしは理想の柔道という山の8合目半くらいにいる感覚でした。「まだ、だめだ」と思いながら引退したのです。しかし、その時、初めて自分が登ってきた道を振り返って驚いたのです。「こんなに高くまで登っていたのか」と。それほど、ずっと頂上だけを見ていた現役時代だったのです。

4強の壁は、攻め続けることの強さを教えてくれました。この4人の先輩のおかげで、上を目指す気持ちを忘れることなく、戦い続けることができました。

203連勝は、そうして達成したのです。



第1章 教育者として⑨ 「体育学部長」

お話ししてきたように、わたしの人生の原点は、19歳で全日本選手権初優勝をするまでの中に、ほぼ詰まっています。祖父、白石監督、佐藤先生の3人に育てられ、教えを受けられたことは、わたしにとっては大きな幸運でした。

そして今、教育者として、この大事な時期にある子供たちを預かる立場にいます。その教育者に大事なことは「自分が生き生きと生きる」と考えています。活きのいい魚をイメ

ージし、あえて「活」という字を当てています。

わたしが子供のころ、日本は希望にあふれ、みんな生き生きとしていました。今はどうでしょうか。物は増えても、自殺する人は年間3万人以上います。コミュニケーションをうまくとれず、心療内科に通う。他人への思いやりの心が薄れ、いじめが増える。詐欺や殺人。「日本は病氣だな」と思うことが多いのです。

なぜか。わたしは、00年3月に発足した小淵恵三首相（当時）の諮問機関「教育改革国民会議」のメンバーに選ばれました。その時に小淵首相に送った手紙があります。その中に答えがあります。

「昨日生まれた子供も、100

年前に生まれた子供も、基本的には変わらない。どう育つかは、家庭環境、学校教育、地域教育に関係があるが、最も影響しているのは世の中の価値観ではないだろうか。子供でなく、大人に責任があるのだ。教育は知・徳・体をバランスよく育むことが大切である。

現在は知に偏りすぎ、徳が軽視されている。それは、大人の倫理観の欠如にほかならない」

つまり、教育者自身が「活き活き」としなければ、学生に活気など生まれません。もちろん、それだけが教育ではありません。しかし、まず教育者自身が輝くこと、過去ではなく、

今が、将来が輝くことが大切なのです。小淵首相への手紙の最後は、こう結び

77年全日本選手権決勝で遠藤純男さんを判定で破り、史上最年少の優勝を果たした。遠藤さんとは以後何度対戦した



柔道からスポーツ全体へ

ました。

「わたしたち大人が心がけなければならないのは、次の時代に何を残すかである。その根本にあるのが、まさに教育だと考える」

09年4月、わたしは東海大体育学部長に就任しました。それまでの柔道を通じた教育者としての立場から、体育学部長として、大学経営に対しての責任を負うことになりました。わたしの人生の方向が少し変わったのです。

スポーツは社会に何をし、どう貢献できるのかを考えることが増えたのです。「人間づくり」のための手段が、柔道からスポーツ全体に広がったのだといえます。

では、スポーツとは何か。日本から世界へと羽ばたいた道の途中で、わたしはそれを考えさせられることに遭遇しました。それが、第2章のテーマです。

第2章 スポーツの価値①
「我この道を行く」



ワークである

これは、現役引退直後の1986年(昭和61)に出版した自伝「黒帯にかけた青春」の結びに書いた言葉です。

スポーツマンの汗が、社会で立派に評価されるように
に
スポーツに対する社会の意識を高め
スポーツを通して社会に貢献する
この道で自らの汗を流していきたい
これがわたしのライフ・ワークである

当時のわたしは、日本のアマチュアスポーツ選手の評価は、海外に比べて、不当に低いと考えていました。

そう考えた最も大きなきっかけが、80年のモスクワ五輪のボイコットです。国際政治の圧力によりボイコットが屈した大きな事件でした。ただ、わたしは柔道家、スポーツマンである前に、日本人です。

「日本のために」と言われれば我慢もできるのです。しかし、幻の五輪代表に与えられたのは、日本オリンピック委員会(JOC)が発行した認定証だけでした。

では、ボイコットを主導した米国はどうか。カーター大統領は代表選手全員をホワイトハウスに招き、なぜボイコットに至ったかを

説明し、すべてのテーブルを回って「申し訳ないが、国益のためにしたわたしの決断を、理解してほしい」と話したそうです。

77年に全日本選手権で初優勝を



果たし、わたしは世界へと飛び出しました。79年からは世界選手権で3連覇し、84年ロサンゼルス五輪で金メダルを獲得しました。

その間、似たような経験を何度

もしました。そんな中でいっただいたのが国民栄誉賞だったのです。アマススポーツ界を代表してわたしが受賞したのだという喜びと、だからこそ、アマススポーツの振興と発展に力を尽くさなければならぬと考えました。それが、冒頭の言葉と

84年10月9日、最年少の27歳で当時の中曽根康弘首相からいただいた国民栄誉賞はアマススポーツ界全体への賞だ

なったのです。

しかし、わたしは今、こう考えています。われわれスポーツ関係者は、どうしたら世界で勝てるかということには、一生懸命に取り組んできた。でも、どうやらアマススポーツが日本を明るくし、元気にできるか。スポーツができる社会貢献に関しては、取り組んでこなかったのではないだろうか。日本でスポーツの社会的評価が低いことの責任の一端は、われわれにもあるのではないかと。

わたしは現在、神奈川県体育協会会長の肩書を持っています。スポーツの普及、発展を通して社会に貢献するというライフ・ワークに変わりはありません。しかし、そこに至る方法論に変化がありました。第2章「スポーツの価値」は、その流れを追いつながら進めていきたいと思っています。

幻の代表選手 日米の扱いの差

我が道 12 直筆

第2章 スポーツの価値②
「最後の黒星」

1977年(昭和52)の全日本選手権で初優勝したわたしは、その年の11月、現役最後の黒星を喫しました。全日本学生体重別選手権の決勝で、吉岡剛さん(中大)に判定で敗れたのです。いつもは守備的な吉岡さんが、開始から強引に攻めてきました。前半にポイントを奪うと、中盤以降は守りに入ります。研究の末の戦法だったのでしょう。わたしは返し技を警戒し、積極的に攻撃することを控えてしまいました。

それでも勝ったと思ったのですが、判定は1-2の僅差でした。全日本選手権後の全日本体重別選手権でも優勝し、うぬぼれもあったのかも知れません。余力を残して戦い、敗れたのです。

佐藤先生に怒られました。

「勝負にこだわった試合をするなら、これ以上、大きくはならない。自分の力を出し切れ」

佐藤先生には、次のチャンスがあると思うな、と教えを受けていました。4強の壁を破って全日本選手権で初優勝した時は、攻め続けることの強さを知りました。その直後の敗戦です。力を出し切ることで、誰が見ても山下の勝ちと思う、攻め続ける試合をすること。この敗戦をきっかけに、それが勝

負哲学となりました。

しかし、「勝つ」ことを求めながら、佐藤先生が言う「勝負にこだわった柔道をしない」とは、どういうことでしょうか。



スポーツには、チャンピオンを目指す「競技スポーツ」と、健康や楽しみのために行う「生涯スポーツ」があります。わたしが今、日本のスポーツについて感じているのは、競技スポーツ、つまり、勝利至上主義に偏りすぎていないかということです。

世界の頂点を目指し、夢や可能性に挑戦するのは、とても意味のあることです。しかし、日本は最初から勝負ありきというやり方があるのではありませんか。最後の敗戦となった吉岡さんとの試合。背筋を伸ばし、胸を張る構えがわたしの特徴だったが、腰が引けてしまっている

する。勝つことから始めるから、フレッシュさを感じたり、やらされたたり、させたりするスポーツになってしまうのです。

本来、スポーツは「自ら」行うものです。最初は楽しむためにやる。そこから、もっと上手になりたい、もっとチャレンジしたいと思った時に、「自ら」高いハードルに向かっていくのです。

スポーツは若者と競技者だけのものではありません。日本で生涯スポーツの裾野が広がらない、その環境が整わないのは、この「勝負にこだわる」考え方にも原因があるのではないのでしょうか。

最後の敗戦後、わたしは勝負のために相手に合わせる柔道ではなく、いかに自分の形に持ち込むかという柔道に徹しました。そして34年後の今、再び最後の敗戦が持つ深い意味を感じています。

勝負にこだわって失うものとは

第2章 スポーツの価値③
「松前総長」



スペイン政府が「国の代表ではない」「台湾選手団にビザを発行しない」と発表したことに抗議し、国際柔道連盟が中止を決めました。わたしに

最後の敗戦をする直前の1977年(昭和52)9月、世界選手権がスペインのバセロナで行われるはずでした。全日本選手権初優勝を果たして日本代表となり、初めての世界選手権出場に意気込んでいたのですが、大会直前に突然、中止が決定したのです。

「直筆」

としては、最初のスポーツに対する政治の介入でした。

やり切れない気持ちを抑えてくれたのが、10月に急きょ、日本で開催された「日仏三國対抗大会」です。前年の76年モントリオール五輪の重量級金メダリスト、ノビコフ(ソ連当時)との初対戦が実現したのです。

ノビコフは、今でもわたしと対戦した外国人の中で最も強かったと思う選手です。この大会での2度の対戦は、ともに引き分けでしたが、世界トップの選手との対戦は、自信と励みになりました。

世界選手権中止という、選手にとっては最悪の事件の痛みを和らげてくれる、意義のある大会の開催に尽力したのが、東海大総長の

世界平和に貢献できる人間に



松前正義先生です。松前先生は1901年(明治34)に熊本県上益城郡大島村(現嘉島町)で生まれました。わたしの故郷の矢部町から約15キロしか離れて

いません。東北帝大(現東北大学)卒業後、技官として通信省に入省して「無線ケーブル通信用方式」を発明し、それで得た資金を元に東海大を創立しました。

官僚、衆議議員、工学博士、教育者など多くの顔を持つ方でしたが、熊本中学時代に始めた柔道に対する愛情は深く、新興の東海大の柔道部が現在のような強豪に育ったのも、松前先生の尽力があったからといえるでしょう。

松前先生には「日本対外文化協会」の会長という肩書もありました。ソ連を中心とした東欧諸国と東海大の学生時代、試合後に松前総長と握手。本当の祖父・泰蔵(中央)同様、孫のようにかわいがっていたのだ。

の文化交流を目的に設立した団体です。そのパイプを使って「三國対抗」は実現したのです。

わたしが松前先生と初めてお会いしたのは、東海大相模高に転校する直前でした。以後、孫のようにかわいがってくださった先生によく言われた言葉があります。

「僕がなぜ、君を応援するか分かるか。試合で勝ってほしい。それもある。しかし、それだけではない。日本で生まれ、育った柔道を通して、世界の若者との友好親善を深めてほしい。スポーツを通して、世界平和に貢献できる人間になってほしいんだよ」

当時は、その真意を分かっていたかもしれませんが。しかし、柔道を通して、世界や平和のために何ができるか。柔道が持つ可能性を、この大会を開催することで教えてくれていたのです。



直筆

第2章 スポーツの価値④ 「金メダル」

1979年（昭和54）12月、バルセロナ大会中止で4年ぶりとなった世界選手権が、フランス・パリで行われました。わたしにとって初めての世界選手権です。

この年は、全日本選手権をオール一本勝ちで3連覇しました。試合時間が計17分の圧倒的な優勝でした。「山下時代到来」という評価通りに、充実していました。そして、この世界選手権から、わ

たしは「日本」「日本柔道」を背負うことになりました。ただ、当時は「新聞に、山下でなく、日本柔道が負けたと書かれるのは嫌だな」というもので、重圧として意識はしていませんでした。

意識したのは85年に引退を発表した時でした。会見前、わたしは3日ぐらいジャンプできるのではないかというほど、体が軽くなるのを感じました。「こんなに重いものを背負っていたのか」と引退して初めて気がついたのです。

スポーツの勝負は勝つこともあれば、負けることもある。甘いものではないかもしれません。それが、代表選手になれば、周囲の期待が重圧にもなります。でも、わたしはこう考えます。夢とは自分だけの価値です。その夢を周りが期待し、評価をしてくれる。実にありがたいことです。誰も期待してくれなかったら寂しいでしょう。だから、わたしは自分の夢への

挑戦が「大変ですね」と聞かれると、違和感を感じました。戦うのは自分のためです。誰よりも自分が勝ちたいと思っているのです。全日本男子の監督の時、五輪代表選手に、こう伝えました。

「重圧で断崖絶壁に立たされたような気持ちになったら、遠慮なく言ってくれ。すぐに補欠の選手と交代させるから」

その階級で日本で一人だけ、自分の夢に挑戦できる君たちは幸せじゃないか。一番、つらいのは、わずかの差で代表になれなかった補欠の選手なんです。だから、日



79年の世界選手権パリ大会で初めて世界王者になった。五輪金メダリストの夢に向けて大きな一歩となる優勝だった

大変だからこそやりがいがある

本中の柔道家で最も「活き活き」と輝いてほしいと求めたのです。大変だからこそ、やりがいがあるのです。やりがいには、誇りを感じるべきなのです。それが、スポーツでなく、仕事でも、同じではないでしょうか。わたしは、柔道で背負ったこの重圧を、これからも背負える自分でありたいと思って、今を生きているのです。

初出場の世界選手権は、準決勝まで4試合に一本勝ちし、決勝は地元のルージュを技ありで破って初優勝しました。金メダルを首にかけてくれたのは、大会直前に国際柔道連盟会長に就任した松前重義先生でした。敬愛する師から初めて金メダルを授与され、幸福感に浸ったわたしの次の目標は、一つしかありませんでした。モスクワ五輪が、翌年に控えていました。

第2章 スポーツの価値⑤
「ボイコット」



JOCはそれでも参加の道を模索しました。4月21日。各競技団体の緊急会議が開催され、代表選手が意見をしました。涙を流したレスリン

1980年(昭55)5月24日。日本オリンピック委員会(JOC)が、モスクワ五輪の不参加を正式に決めました。前年末のソ連軍によるアフガニスタン侵襲に抗議し、米国が1月に五輪のボイコットを宣言しました。2月には日本政府が追随しました。

衝撃だった「参加すべきでない」

グの高田裕司選手をはじめ、参加を訴えましたが、最後は政治の圧力に屈したのです。しかし、世間は選手が思っていたほど同情的ではありませんでした。「高田は女々しい」「人殺しが行われている時にお祭りに行きたいとは何事だ」「おまえたちは恵まれている」。世論調査では、参加すべきが55%で、参加すべきでないの45%と大きな差はありませんでした。ショックでした。しかし、これがスポーツと、五輪に対する国民の正直な思いだったのです。日本政府は、約15億円の補助金カットをちらつかせてJOCに圧力をかけました。「米国の意向は無視できない」と言うばかりで、



自らの意思を持たず、説明責任も果たさない態度は、選手にとって悲しいものでした。今でも納得していませんが、31年がたち、スポーツ界の側にも問題があるのではないかと思うのです。引退後、わたしはことあるごとにスポーツ界、選手の地位向上を訴えました。首相が五輪金メダリストに祝福の電話をかける。首脳

記者が岸まそが選手に涙を流した高田裕司の姿を訴えたことには驚かされたこともあります。

しかし、スポーツの社会的評価が低いのは、政治だけの問題ではないのです。昨年、民主党のスポーツ振興の会議でわたしは話しました。「10年前のわたしは間違っていた。どうしたら世界で勝てるかには一生懸命、取り組んできたが、どうしたらスポーツが社会に貢献できるかを考えてこなかった」五輪メダリストの会合があっても、話すのは過去の栄光のことが多い。もっと、社会や世の中のため、スポーツに何ができるかを話し合わなければいけないのです。勝つことで勇氣、元氣を感じてもらえる。それだけがスポーツではないのです。われわれの悲しい思いを繰り返さないために、なぜスポーツが社会の発展につながるのか、より多くの人に認知してもらう必要があるのです。

第2章 スポーツの価値⑥
「2階級制覇」

直筆

定で「痛み分け」となりましたが、全治3カ月の大ケガで五輪不参加の複雑な感情が、スッと消えました。出たくても出られないのですから、皮肉なものです。

モスクワ五輪のボイコット決定翌日の1980年（昭55）5月25日、五輪代表選考会を兼ねる予定だった全日本団体別選手権が行われました。この大会で遠藤純男さんの捨て身の力二ばさみを受け、左足のひざを骨折します。国際審判規定で「痛み分け」となりましたが、全治3カ月の大ケガで五輪不参加の複雑な感情が、スッと消えました。出たくても出られないのですから、皮肉なものです。

リハビリを経て、翌年4月の全日本選手権で5連覇を果たし、オランダ・マーストリヒトで行われた世界選手権に出場しました。95kg超級（現100kg超級）と無差別級の2階級制覇への挑戦です。当時は挑戦すること自体が初めてのことでした。

大会初日の95kg超級は、5試合合計9分4秒のオール一本勝ちで優勝しますが、128kgの体重が5kgも落ちました。想像以上の疲労と重圧で、文字通り体を削られたのです。無差別級もオール一本で優勝しましたが、とにかくきつかった記憶が残っています。

この史上初の快挙で、フランスのスポーツアカデミーが決めるグランプリ、つまり、その年の世界

のベストアスリートに選ばれました。柔道の本家、日本では大きな話題にはならなかっただけに、喜びとともに複雑な気持ちでした。これが日本のスポーツに対する



評価だったのです。当時、自民党実力者の江崎真澄衆議院議員がフランスを訪れると、ミッテラン大統領は真先に「柔道の山下選手は素晴らしい」と話したそうです。江崎さんは知らなかったそうです。が、会談は予定をオーバーして友好的に進んだといえます。スポーツが持つ力の一つだと思います。今でこそ、日本の政治家はサッカーなどの話題を会話の潤滑油にしますが、当時はスポーツに関心などなかったのです。関心がなければ、スポーツ行政が立ち遅れる

遠藤さんの執念の力二ばさみ。翌年、園遊会で昭和天皇に「柔道は骨が折れますか」と聞かれ「はい、昨年骨折しました」と答えてしまった

のも当たり前です。

世界を転戦するようになったわたしは、ナショナルトレーニングセンターすらない日本スポーツ界の現状に危機感を覚えました。そんなわたしが、スポーツの社会的評価を、競技スポーツの環境整備に結びつけてしまったのは、やむを得なかったと思います。

しかし、世界のスポーツ界が進んでいたのは、競技力や環境だけではなく、世界で活躍し、引退後に政治や医療、経済など、さまざまな分野で頑張っている人がいる。そうした人が、社会貢献活動をしているのです。

施設や予算だけが、スポーツの社会貢献ではないのです。スポーツマン個人が、何ができるかを考える必要があるのです。「グランプリ」には、そんな願いも込められているのではないのでしょうか。

世界選手権で感じた日本の限界

第2章 スポーツの価値⑦
満月が欠け始めた



世界選手権で史上初の2階級制覇を達成したわたしに、大きな変化が生じました。勝負に対して燃える気持ちが、湧いてこないのです。理由は二つありました。一つは、完璧に近い形で2階級制覇を果たし、向上心を失ったのです。かつて壁だった4強はすでに引退し、世界にも敵がない。現状に満足し、自己満足のぬるま湯に浸っていました。もう一つは、大学院の修士論文な

どに追われていたことと、東海大柔道部のコーチになったため、自分より学生の指導を考える時間が増えたことです。

わたしには、現役時代から引退後の夢がありました。東海大に残って教育者の道を歩むこと。そして、指導者として柔道王国ニッポンを再建することでした。

スポーツ選手の第二の人生は難しいと言われます。中には、現役時代の財産や貯金で榮えよう、自分の価値をできるだけ高く売ろうとする人がいます。

でも、スポーツで成功した人には、そこまでの道の中に必ず秘訣があるのです。人一倍の努力、明確な目標、そのためによく考え、失敗しても立ち上がって前を向

き、人の教えを素直に聞いたはず。同じ気持ちと姿勢で新たな仕事に挑戦すれば、みんなが応援し、アドバイスしてくれる。引退



をしても、新しい世界でまた、輝けるはずなのです。

引退後の方が人生は長い。わたしは柔道で培ったものを基礎に、その年代、年代で輝いてきたつもりです。トップスポーツ選手は大きな能力と可能性を持っている。過去を振り返らない、今と将来が輝くことが大事だと思うのは、そのためなのです。

話を戻しましょう。

佐藤宣彦先生は、わたしの燃えない心を尻抜いていました。

「のほせ上がっているんじゃないのか。最近、佐藤に一本勝ち

斉藤とは79年の初対戦から引退試合の85年全日本選手権決勝まで8戦した。全勝だったが、一本勝ちが初対戦だった

「斉藤に一本勝ちできないじゃないか」

できないじゃないか」

斉藤仁。3つ年下の国士舘大の学生が、急激に力をつけていた。2人が学生だった1979年（昭54）の初対決で一本勝ちしたものの、以後は判定勝ちが続いていました。青森生まれの後輩が、強力なライバルとして頭角を現してきたのです。わたしの闘争心に再び火がつかしました。

83年4月、全日本選手権決勝で斉藤を破り、前人未踏の7連覇を達成しました。秋にはモスクワでの世界選手権で3連覇しますが、苦戦の連続で、負けなかった安堵の方が大きい優勝でした。脚や肩、脇腹などのケガで、心に続いて体が悲鳴を上げ、この大会を機に体力の衰えをはっきりと自覚しました。翌年のロサンゼルス五輪を最後にしたい。初めて進退を考えたのです。



第2章 スポーツの価値⑧ 「暗雲」

1984年（昭和59）8月11日。ロサンゼルス五輪の柔道男子無差別級が行われた日です。体力的に「満月が欠け始めた」と感じていたわたしは、ひそかに最初で最後の五輪と心に決めていました。

日本のため、日本柔道のためとは考えず、この日のためにすべてを懸けてやってきた自分のために戦おうと考えて臨みました。しかし、やはり五輪は過去のどの大会よりも緊張しました。「二人の山下」

が、現れたのです。

選手村入り後、一人になると、控室の隅でタオルをかぶって肩を震わせている自分が頭に浮かぶのです。そうかと思うと、金メダルを胸に表彰台に立っている自分があります。初めての経験でした。

緊張したらだめだ、とは考えませんでした。五輪のために、命を懸けてやってきたんだ。誰よりも激しくチャレンジャーなんだ、と言いつつ聞かせました。自分のために戦うんだ、と。緊張を前向きなエネルギーにすることができ、ぐっすり眠れるようになりました。

当日がやってきました。1回戦のコーリー（セネガル）は、27秒で仕留めました。2回戦は、逃げる腰のシュナーベル（西ドイツ）を

最後の五輪で「二人の山下」



引き寄せ、内股を仕掛けました。やや不十分でした。その瞬間、軸足の右側に痛みが走り出しました。送り繰り出す一本勝ちしましたが、引き揚げるわたしの姿に場内のどよめきが起きました。ふくらばきに肉離れを起こした右足を、明らかに引きずっていたのです。

準決勝のデルコロンボ（フランス）は、過去の対戦がすべて一本勝ちの相手でした。しかし、わたしの右足は動いてくれません。右側に仕掛けてきたデルコロンボの大外刈りを支えきれず、後ろに倒れてしまいます。体をひねって一本は免れましたが、「効果」を奪われ、先行を許しました。

掛かるはずのない技でした。いつもなら反射的に技をかわるシュナーベルに内股を掛けた瞬間、右ふくらはぎを肉離れ。軸足の負傷は、立ち技を掛ける際に大きな支障となった

す右脚が反応せず、しかも、不十分な技を耐えることができない。外国人相手に、自分の技を掛け損なってポイントを取ったことはありましたが、技を掛けられてポイントを許したのは初めてでした。絶体絶命でした。自分の技を出せず、相手の技を支えきれない。「俺は、こんなところで負けるのか」。再び、弱気な山下が顔をのぞかせました。

しかし、この時も「もう一人の山下」が現れたのです。「おまえはその程度なのか！脚をケガして、負けるために、五輪に来たのか！」

連う。こんなケガのために、五輪で負けたまるか！大内刈りからの横四方固めで逆転の合わせ技一本勝ちでした。しかし、わたしの右足の痛みは、さらに悪化していました。

第2章 スポーツの価値⑨
「ラシュワン」



ムハムド・ラシュワン。

84年ロサンゼルス五輪柔道男子無差別級決勝で、わたしと対戦したエジプトの柔道家です。この試合態度が評価され、ユネスコ国際フェアプレー賞を受賞しました。

ビデオを見ると、ラシュワンは一度、わたしの右側に足を出したあとに、逆の左側に脚を入れる左払い腰にきています。それを、左足を引いてかわして横四方固めに入り、一本勝ちをしました。

「なぜ、山下の右脚を狙わなかったのか」と報道陣に問われたラシュワンは答えました。

「わたしにはアラブ人の誇りがある。そんなひきょうなことはできない」

別のところでは「山下はわたしにとって神様だ。そんな存在に對し、柔道家として、ひきょうなこととはできない」と答えたといひます。

ラシュワンが右脚を狙ったかどうかという議論がありますが、狙ってきたとは思いません。それどころか、ケガを意識してもしなかったと思います。脚をケガした相手を攻めるのなら、前後左右に引きずればいいのですから。

正々堂々、思い切った向かっていく。そういう気迫が、ラシュワンからは感じられました。彼がフェアだったのは間違いない。フェアプレー賞に十分、値する選手だったと思います。



わたしは今、神奈川県体育協会会長として、スポーツを通してフェアプレーの精神を教える活動をしています。「いじめをなくす」ことを、活動の柱にしているのです。

す。子供たちが、スポーツで培ったフェアプレー精神を、日常生活でも発揮する。世の中をフェアな社会、ひきょうな振る舞いがない社会にしたい。勝てばいい、もうければいいという風潮が、少しでも減ってほしいのです。

その意味で、ラシュワンの試合態度はフェアプレーの象徴だと言っています。

際、しれ国もる
るわはて今
がハッシュワ
上ハッシュワ
にハッシュワ
台ハッシュワ
彭ハッシュワ
表ハッシュワ
度ハッシュワ

フェアプレー精神の象徴

そもそも、スポーツはフェアに戦うのが当たり前のことです。相手のケガがあるから、勝ちたい気持ちが強くなったり、相手が痛めたところを狙いたくなる気持ちが出てくるのです。

一方で、スポーツは相手の弱いところに自分の強いところをぶつける側面も持っています。選手によっては、当然のようにケガを狙ってくる人もいます。しかし、ラシュワンはしなかった。それをナイーブだと言えてしまう。その状況に惑わされず、当たり前前にフェアに戦える。そこに価値があるのです。

いじめをしない強さ。いじめをさせない強さ。人の弱みを攻撃しないだけでなく、人として当たり前のことを、当たり前にできる。それを、スポーツを通して伝えたいと思っています。

第2章 スポーツの価値⑩
「引退」

表彰台の上から、美しい日の丸を眺めながら「君が代」を歌ったロサンゼルス五輪翌年の1985年（昭和60）の全日本選手権で、わたしは引退しました。

83年世界選手権で体力的に「満月が欠け始めた」と感じていたことに加え、五輪金メダルの達成感で闘志も失われてきていました。84年10月9日の祖父・泰蔵の死も影響しました。この日、わたしは国民栄誉賞の授与式が行われた首相官邸にいました。それ

を見届けるように、授与式の1時間後に祖父は息を引き取ったのです。

「柔道は格闘技である。闘志、気力が衰えたら、格闘技をする資格はない。青畳の上では、死ぬことも覚悟しなければならぬ」この勝負哲学に、わたしの心が

ついていけなくなったのです。練習を再開しても、学生に投げられるほど、状態は最悪でした。

その状態からわたしを引き上げてくれたのは、約100人いた東海大柔道部員でした。すでにコーチ

として指導者の道も歩み始めていたわたしは、はっきりと教え子たちの目を意識したのです。

「勝つばかりが指導ではない。負けても、精いっぱい戦う姿を見

せるのも指導のはずだ」

それまで、「いかに山下の柔道をするか」ばかりを考えてきました。教え子のために頑張ろう。そう思った時、わたしの調子は上が



っていきました。

最後の全日本選手権は決勝で斉藤仁を僅差の判定で破り、9連覇を達成しました。この試合を最後に、わたしは2回目の人生である指導者の道に進みます。柔道王国ニッポンを再建させる夢への挑戦を始めたのです。

88年ソウル五輪で日本男子は金メダル1個に終わり、「惨敗」と評されました。続く92年バルセロナ五輪前に全日本コーチとなったわたしは、監督として臨んだ96年アトランタ五輪で金2個、銀2個に日本を引き上げま

した。シドニー五輪男子100kg超級決勝、篠原の内股透かしは完全に決まっていた。ビデオで猛抗議したが、判定は覆らなかった。

00年シドニー五輪は、100kg超級の篠原信一（現全日本男子監督）の大誤審による銀メダルがあったものの、金メダル3個を獲得し、復活の成果を挙げました。

自分の夢である全日本男子の監督を任せてもらったのだから、すべてを懸けて挑む。数々の改革をし、柔道ニッポンの復活に力を注いだ12年間でした。しかし、その過程でわたしの心に微妙な変化が生まれてきます。

「大事なものは、勝ち負けだけではないのではないか」

嘉納治五郎師範が掲げた「精力善用・自他共栄」の理念。松前重義先生は「柔道を、スポーツを通して世界平和に貢献してほしい」と繰り返し、言いました。

勝負の世界から身を引く時が、きていました。

柔道ニッポン復活への挑戦

第2章 スポーツの価値①
「使命」



スポーツは世界で勝つことには一生懸命、取り組んできた。しかし、スポーツを勝負だけで捉えてはいけません。スポーツの価値、使命についてわたしは今、こう考えます。「スポーツは生きる力を与えてく

この章の冒頭で触れた通り、スポーツの社会的価値を上げたいというわたしの現役引退直後の願いは、今、スポーツがいかに社会に貢献できるかに変わっています。

現役引退後、わたしは英ロンドンに1年間、留学しました。そこでは、子供からお年寄りまで、さまざまな人がスポーツに親しんでいました。障害者やハンデを持っていた人も、同じようにスポーツをできる環境があるのです。

仲間と汗をかく大切さ伝えたい

実は、私は自閉症の次男がいます。努力することで、結果を出してきたわたしは、それを知るまでに、結果を出せないのは、その人間に責任があるという「強者の論

理」で物を見ていました。次男とともに生きることで、初めて弱者やハンデがある人の心に思いを寄せるようになったのです。

今の日本は、10年前と比べて心の病気を患う人が格段に増えています。年間の自殺者が3万人もいるのは、先進国では断トツの数字です。勝負にこだわり過ぎて、子



財団法人 日本体育協会

現役時代の82年(昭和57)ごろ、体協のボス・タートンに起用された。「スポーツ・オール」は当時のスローガン

レッシュでできませんか。仲間と

供たちにスポーツ格差が生まれていきます。スポーツをする子としない子が極端に分かれ、大変な体力の差が生まれているのです。

一緒に汗をかくことが、力を合わせることも思いやり大切さを思い出させてくれないでしょうか。酒、たばこ、運動をしないの三つで、最も健康に悪いのは運動をしないことだという統計があります。運動が医療費削減に大きな効果があるというリポートもあります。スポーツは、ストレスの発散や体調の維持、つまり、心と体の健康に役に立つのです。

第3章 国際交流と平和① 「もう一枚の表彰状」



表彰狀
山下泰裕殿

第3章 国際交流と平和
もう一枚の表彰状

あなたは小学校時代、その比類ない大きな体を持て余し、けんかをして相手を泣かせたり、教室で暴れたりして、われわれ同級生に多大な迷惑をかけました。

しかし、今回のロサンゼルス・オリンピックにおか

れましては、われわれ同級生並びに国民の期待を裏切るまいと、不慮の怪我にもかかわらず、持ち前の闘魂を発揮され、みごと金メダルに輝かれました。

このことは、あなたの小学校時代の数々の悪行を清算して余りあるだけでなく、われわれ同級生の誇りとするところであります。

よってここに表彰し、偉大なるやっちゃんに対し、最大の敬意を払うとともに、永遠の友情を約束するものであります。

昭和五十九年八月二十六日
昭和四十四年度浜町小学校同級
生一同

わたしは、自宅を含めて目につく場所に過去の栄光の品を一切、置いていません。たった一つ飾っているのが、この表彰状です。ご覧の通り、小学生のころ、わたしはクラスメートに大変、迷惑をかけたました。その同級生が、柔道を

通して成長したわたしを許し、永からです。

遠の友情を誓ってくれたのです。今でも、この表彰状を見ると「やっちゃん、頑張れよ」と励まされている気がするのです。

第3章のテーマは国際交流と平和です。わたしは、柔道を通して平和に寄与する活動を試みています。柔道にその力があると信じて

からです。

なぜ、柔道なのか。

日本は柔道創始国だからです。柔道は、国連加盟国よりも多い約200の国と地域で行われている五輪正式競技です。その世界中の柔道家が、日本を聖地とし、憧れているのです。他の競技ではできない、主導的な役割を日本は果た



64年、柔道初採用の東京五輪無差別級決勝で、勝者・ヘーシンクを称え、握手する故神永昭夫さん（左）。参加は27カ国・地域だったが、近年は100近い国と地域が五輪に参加する

「永遠の友情」得て新たな試み

ՀԻՄԱՆԱԴԻՔԱՅԻՆ ՊԵՐՏԸ

もう一つ、柔道は「道」の哲学を持っています。礼節を重んじ、相手に敬意を払う。「精力善用・自他共栄」。ロシア柔道連盟のラフリン副会長は「宗教に見られる信仰の核心を、柔道の哲学は内包する」と表現します。フランス・ポルドー大のブルース教授は「世界中で柔道は教育的スポーツと考えられている」と言います。

この柔道精神に魅せられて、多くの外国人が日本を知ろうとし、日本を訪れるのです。

わたしは「NPO法人 柔道教育ソリタリティー」の理事長をしています。柔道で「永遠の友情」を得たわたしが、柔道を通して世界に友情の輪を広げ、平和に貢献する。第3章では、勝負の世界を去ったわたしの、新たな試みを紹介したいと思います。



第3章 国際交流と平和③

「陰謀」

日本国内のマナーとモラル改善に取りかかったわたしに、その活動を世界に広める役目が回ってきました。2002年(平14)秋、国際柔道連盟(IJF)の教育・コーチング理事への立候補を依頼されたのです。

暗い背景がありました。このポストは長年、日本人が務めていました。しかし、欧州柔道連盟(EJF)会長のビゼール氏(現IJF会長)が、日本外しを狙い、他大陸を巻き込んでこのポストを奪う計画を進めていたのです。

この野望阻止のために、世界的に知名度があるわたしに白羽の矢が立ったのです。03年のIJF総会は、ビゼール陣営が候補擁立を断念して無投票当選でした。

しかしその後、林啓蔵会長(当時)との勢力争いを激化させたビゼール氏は、事業で得た豊富な資金力を背景に反対派を徹底的に排除して、朴氏を辞任に追い込み、会長代行に収まったのです。07年総会で会長に就任すると、重要ポストを次々と自派で固め、教育・コーチング理事にも対立候補を立てました。

わたしの敵は、対立候補ではなく、ビゼール氏です。それで

も、非民主的なやり方に違和感を覚えたわたしは、立候補を決定しました。ビゼール側の友人がささやきました。「おまえを世界の舞台から失うのは、大きな損失だ。これは政治なんだ。ビゼールを支持すれば、対抗馬は降ろす」。保身のために、信念を曲げることはできない。07年総会での選挙は61対123の大敗でした。

こういう連中とは、二度と仕事をしたくない。その気持ちは今も変わりませんが、この政争を通じて学んだこともあります。日本は伝統の名のもとに、IJFの改革に反対することが多かった。カラー柔道着の論争がよい例です。そうした行動で、日本は世界で信頼を失っていたのです。よく考えてください。野球とベ



さかい行大は、催されたい。03年9月に大阪で開かれた世界IJF選手権大会は、英語での試合が行われ、海外からの観客も増えた。たっ幅強

日本に足りないことを痛感

イスボールは違う。インドのカレーとカレライスは？中国のラーメンは日本で独自の文化になっています。日本の柔道人が守らなければならないのは、嘉納師範が掲げた柔道の哲学であって、形ではないのです。

理事を務めた4年間、わたしは柔道の普及・発展と、教育的価値を伝える活動で世界中を飛び回りました。その過程で、世界中に友人を得ることができました。柔道の国際化が、日本流を押しつけることではなく、それぞれの文化や伝統と混じり合うことだと知りました。自分たちの文化を世界に発信する努力が、日本には足りないことを痛感したのです。

中でも、今のわたしに大きな方向性を与えてくれたのが、ロシア大統領、ウラジミール・プーチン氏との出会いでした。

第3章 国際交流と平和④
「ブーチン」



わたしが尊敬する東海大創立者の故松前重義先生が、1979年(昭和54)に作成した「国際柔道連盟(IJF)会長立候補にあたって」という文章があります。松前先生は、著しい経済成長の一方で国際的な尊敬を集められない当時の日本を嘆き、その原因の1つに、日本に対する理解の不足を挙げています。「では、どのようにして日本の文化を海外に紹介するか。そして、文化を通じて日本への理解と尊敬を深

めてゆくか。私は、この核になるものこそ、柔道であると考えている」技術者、教育者、政治家、柔道家…。多くの顔をもって、教育や文化、国際交流などの活動をしてきた松前先生が「おそらく最後の仕事として」、77歳での立候補を決定したのです。

日ロ首脳会談へ3つの提案

「この仕事はスポーツによる世界の交流と発展という面から、世界の平和にも寄与できるだろう。柔道は、最も平和的かつ礼節を重んずるスポーツであり、それは日本の精神の結晶であるといつてよい。私は、この精神を世界に広めてゆきたい」



「この仕事はスポーツによる世界の交流と発展という面から、世界の平和にも寄与できるだろう。柔道は、最も平和的かつ礼節を重んずるスポーツであり、それは日本の精神の結晶であるといつてよい。私は、この精神を世界に広めてゆきたい」

文章の最後は、こう締められています。柔道と平和。一見、結びにくい両者が、この文章でび

「この仕事はスポーツによる世界の交流と発展という面から、世界の平和にも寄与できるだろう。柔道は、最も平和的かつ礼節を重んずるスポーツであり、それは日本の精神の結晶であるといつてよい。私は、この精神を世界に広めてゆきたい」

供の頃は「ゴロツキだった」といいます。強くなるためにレスリングやボクシングをやり、やがて柔道にたどりついた。「考え方や人生観、人との関わり方など、柔道との出会いが今のわたしをつくった」というのです。

モスクワ郊外の公邸には、柔道場があり、嘉納師範の銅像があります。現在も稽古を欠かさず、日本の文化に敬意を持っている。ある首脳会談で、親日家で知られるフランスのシラク大統領(当時)が日本について長々と話すのを制し、「わたし以上の日本通は、ここにはいない」と言ったという話もあるほどです。

03年1月の会談に向け、わたしは3つの提案をしました。その1つが、03年5月に彼が育ったサンクトペテルブルクの柔道場で首脳会談をやるとういうものでした。

第3章 国際交流と平和⑤ 「柔道の力」



直筆

03年5月、建部300周年記念行事が行われたサンクトペテルブルクに、わたしはいました。
ホストとしての忙しい時間を割いて、フーチン大統領は小泉首相との首脳会談をセッティングしたので、多くの首脳が参加した行事の期間中、フーチン氏と首脳会談ができたのは、米国のブッシュ大統領と小泉首相だけでした。フーチン氏が育った柔道場で、柔道着姿のわたしが柔道教室を行い、それを両

首脳が見学する。首脳会談はその後に行われました。

以後、フーチン氏との交流が深まります。05年11月、首脳会談のために来日したフーチン氏に、わたしは嘉納治五郎師範直筆の書を贈りました。恩師、佐藤宣次先生からいただいた宝物の書には「自他共栄」と書かれています。領土問題など、隣国ロシアとの難問の解決に、少しでも役に立てばという思いでした。

「両国が協力し、発展することを願い、この書を贈ります」
「これは本物ですか」
「もちろん、本物です」
フーチン氏は驚き、絶句しました。柔道家だからこそ、嘉納師範直筆の書の価値が分かるのです。

「これは、とても、わたし一人の物にはできない。みんなで共有しなければならぬ」
帰国したフーチン氏から、すぐに手紙がきました。
「12月にロシアで柔道教室をするので、招待したい」
お互い柔道着を着て、子どもたちに柔道を指導しようという提案



でした。サンクトペテルブルクでは柔道教室後に食事会が行われました。乾杯の時に言ったフーチン氏の言葉が、忘れられません。
「山下さん、日本とロシアの間には、難しい問題がある。しかし、それ以外にはなく、新たに作る気もない。だから安心して下さい。この難問を両国が知恵を絞って解決できたら、

はこれに匹敵する意味を、身をもって知りました。天国では、松前正義先生がほほ笑んだ気がしました。「国際柔道連盟会長立候補にあたって」の精神を、少し実現できた気がしたのです。
2人の偉大な柔道家を身近に感じながら、わたしは次の行動に移ります。
「柔道 友情 平和」
松前先生が、国際柔道連盟会長の時に掲げたスローガンを、実践する団体を設立したのです。

はこれに匹敵する意味を、身をもって知りました。天国では、松前正義先生がほほ笑んだ気がしました。「国際柔道連盟会長立候補にあたって」の精神を、少し実現できた気がしたのです。
2人の偉大な柔道家を身近に感じながら、わたしは次の行動に移ります。
「柔道 友情 平和」
松前先生が、国際柔道連盟会長の時に掲げたスローガンを、実践する団体を設立したのです。

身をもって知った「自他共栄」

両国の間に問題は存在しなくなるのです。さあ、乾杯しましょう」
フーチン氏の隣では、後の大統領、メドベージェフ氏がほほ笑んでいました。
これぞ、柔道の力です。柔道には、平和に貢献できる力があると実感した瞬間でした。
この交流で、嘉納治五郎師範が柔道に込めた哲学の意味を、身をもって知りました。天国では、松前正義先生がほほ笑んだ気がしました。「国際柔道連盟会長立候補にあたって」の精神を、少し実現できた気がしたのです。
2人の偉大な柔道家を身近に感じながら、わたしは次の行動に移ります。
「柔道 友情 平和」
松前先生が、国際柔道連盟会長の時に掲げたスローガンを、実践する団体を設立したのです。

第3章 国際交流と平和⑥
「連帯」



設立は06年4月。きっかけは奥田碩さん（元トヨタ自動車社長、元日本経団連会長）のアドバイスでした。

理解を深めることを目指しています。

「NPO法人 柔道教育ソリタリティー」のモットーは、松前重義先生から受け継いだ「柔道 友情 平和」です。「ソリタリティー」は連帯、結束、団結などの意味を持ちます。柔道の国際的普及を通じた青少年育成、文化交流と異文化

奥田さんの助言で組織立ち上げ

へのリサイクル柔道着の無償贈与

「良いことをやっているが、そのためより、お金集めに割く時間の方が多いいのではないか。限られた時間を有効に使うために、組織をつくったのだろうか」

「この話があった05年当時、わたしは国際柔道連盟（IJF）の教育・コーチング理事として、世界中を飛び回っていました。指導者派遣やセミナー開催、教材製作を通して柔道の普及活動、貧しい国



など、世界の柔道界を裏で支える仕事に取り組んでいました。それとは別に、04年にロシアの北オセチア共和国のベスランで発生した学校占拠事件で、テロに巻き込まれた子どもを、05年12月に福岡で開催される国際中学生柔道

大会に招待しました。ベスランは柔道が盛んな地域です。主催者と外務省の間に入って、実現を手助けたのです。

来日したプーチン氏に嘉納師範の書を贈ったのは、この大会の1カ月前です。プーチン氏は会うとすぐに、言いました。

「テロで傷ついた北オセチアの子どもたちを招待し、励ましてくれると聞いています。ロシア国民として、この好意に心から感謝

を申し上げたい」

驚きました。多忙な大統領が、こんな小さなことを知っている。さらに、大会にはロシアの放送局が取材に訪れました。プーチン氏のような首脳に働きかけるだけでなく、小さな活動でも、国際交流に意味があるのです。奥田さんか

らアドバイスをいただいたのは、そんな時でした。これらの活動のベースとなる組織を立ち上げることを決めました。

NPO法人は、わたしの理想に共感してくれる多くの人の熱意に支えられています。しかし、こういった活動を、中にはスタンドプレーと見る人もいます。ええカッコしやがって、というわけです。でも、わたしは思います。

どう評価されるかを気にせず、自分に何ができるかを考えることが、大切なのだと。

第3章 国際交流と平和⑦ 「反日の街」



直筆

柔道教育ソリタリティーは、貧しい国へのリサイクル柔道着の無償贈与を中心に、指導者、選手の派遣や受け入れ、教材製作など、多くの活動をしています。リサイクル柔道着は、すでに140以上の国や地域に届きました。「姿三四郎」の多言語翻訳といった活動もあります。柔道や武士道の精神がわかる「姿三四郎」は、ブーテン氏をはじめ、海外でも人気がある小説なのです。一方で、力を入れているのが、日

中交流です。きっかけは04年6月に中国柔道協会から、女子と比べ、世界と実力差がある男子の強化を依頼されたことでした。4年後の北京五輪に向け、力を貸してほしいというのです。

迷いました。このころ、中国では反日感情が激しくなっていたのです。しかし、だからこそ、関係改善に尽くすべきではないか。トヨタ自動車などの協力を得て、中国男子の支援が始まりました。すると、半年ほど後に外務省から提案がありました。「日中交流で活躍されていますね。もっと中長期的な活動をしませんか」。ODA（政府開発援助）資金の枠内で、柔道場を造ることにになりました。調査の結果、柔道が盛んな青

島に07年11月、「中日友好青島柔道館」がオープンしました。本格的な交流が始まりました。ハコだけでは友好とはいえない。青島の成果が今後の活動を左右す



日本の税金で南京に柔道場

と考えると、真剣に取り組みました。思いも寄らない要請が舞い込んできたのは、そんな時でした。

「次は南京に造ってほしい」不幸な過去を持つ反日の街。そこに、日本の税金を使って柔道場を造る。そんなことが、可能なのだろうか。「あそこは危ない」「無事をお祈りします」。散々、脅されながら08年11月、南京の地を初めて踏みました。

待っていたのは、想像とは全く別の世界でした。南京大学での講演後、会場から「なぜ、南京に柔道場を造ろうと思ったのですか」

南京柔道場は日本だけでなく、南京市の支援も受けて開館。南京には3月に日本週間があり、日本との経済交流も望んでいる。過去ではなく、未来を見ている都市だ

と聞かれました。

「柔道を通じた日中交流を考えたい時、南京以上にふさわしい場所を知らない」

大きな拍手が起きました。現地に住む日本人に聞けば「日本でのイメージとは全然、違う」「日本人だからと、つらく当たられたことはない」と言います。南京大虐殺記念館には「残虐行為」を表現する展示があふれていました。が、出口前の最後の展示は「中日友好の歴史」なのです。わたしたちは、南京のことを何も知らないのです。

10年3月、「中日友好南京柔道場」はオープンしました。

今年3月21日には、南京から東日本大震災の義援金とメッセージが届きました。たどたどしい日本語で、こんな言葉がありました。「愛するのは国境ない」

第3章 国際交流と平和⑧
「和平へ」



ロシア、中国を中心に、発展途上国への支援や交流活動を続けてきた「柔道教育ソリタリティー」に、これまでとは異質の依頼が舞い込みました。柔道を通してイスラエル、パレスチナの交流事業です。日本と相手国というそれまでの構図から、紛争当事者同士の交流を日本が仲介する構図への進化です。和平への願いを込めた交流の推進です。

ロシアとの交流で関係があった外務省の知人が、イスラエル公使にな

ったのがきっかけでした。外務省、国際協力基金の協力で昨年7月、わたしはイスラエルとパレスチナを訪問しました。

最終日、エルサレムで双方の子どもが計約50人、参加し、柔道教室を開きました。紛争地域の子どもたちが、同じ畳の上に立つ。それだけで目的は達成したと思いましたが、少し道場から目を離している間に、なんと、イスラエルの子とパレスチナの子が一緒に組み合い、乱取りをしているではありませんか。「組み合っている」と、同じ人間だ。パレスチナの子の言葉が印象的でした。

同じ畳上にイスラエルとパレスチナ



この訪問には、もう一つの目的がありました。福岡で開催される国際中学生柔道大会に、双方の子どもたちを招待することです。この構想は、イスラエルから7人、パレスチナから6人の中学生が参加し、昨年12月に実現しました。来日期間中、外国人記者クラブで、両チームの団長が同席で会見をしました。

パレスチナ・カワスミ団長「ふだんの交流はないが、柔道の心を信じ、参加した。この日本滞在がパレスチナの子どもたちに大きな影響を与えると信じる」

イスラエル・ラズミ団長「パレスチナの人々と、われわれの問題や悩みを話すことができた。スポーツを通して交流について、初めて話ができる」

わたしは、こういった交流の際に必ず、「柔の心」「和の心」について話します。

戦う相手は敵じゃない。相手がいるから、自分を磨き、高めることができる。柔道で大切なのは、相手への敬意と尊敬です。

だから、技術指導の前に礼節を教える。双方の子どもたちは、しっかりと礼をすることを覚えて帰っていききました。紛争を解決するのは簡単ではないですが、彼らが柔道を通して、何かを感じてくれたと信じています。

柔道は、民族や国家の友情を育む国際交流に役立つ、計りしれない可能性を秘めています。柔道の力を借りれば、国際社会での日本の理解を深めるだけでなく、日本が国際平和に貢献することができるようになります。

「柔の道」は世界に通じているのです。

エピソード
【自他共栄】

わたしには、人生最後の夢があります。

柔道を創設した嘉納治五郎師範と東海大を創設した松前重義先生に、この世での役割を終えた時に迎えて来ていただきたいのです。

「おまえが山下か。柔道をよく理解し、頑張ったな」と嘉納師範に言っただけ。「ご苦労さん。わたしの目に狂いはなかった。期待通りに活躍してくれた」と松前先生にほめてほしいのです。

それほど、わたしはこの2人の偉大な師を尊敬し、敬愛しています。

何かをやる時、松前先生ならどうするか、嘉納師範は喜んでくれるだろうか、と考えます。2人がいつも、わたしを見守ってくれている気がするのです。

嘉納師範は「講道館の柔道の目的とするところは、単に肉体的の練習にとどまらずして、その原理を社会生活万般のことに応用するところにある。技術方面のことのみ留意して、精神方面のことを忘れている者が決して少なくない。講道館はその目的のために活動していかなくてはならない」と書き残しています。

日清戦争直後の1896年(明治29)に弘文学院を設立し、中国からの留学生を約7000人も受け入れた人でした。その

嘉納師範と松前先生が見守っている



お二人のスケールの大きさは、とてもかなわない。松前先生(左)には、夢で怒られたこともある。お二人にお会いできるまで、わたしの挑戦は続く

中には、魯迅もいたそうです。松前先生は、終戦直後に総理候補に名前が挙がったほどの方だと言っています。キリスト教思想家の内村鑑三に師事し、旧ソ連との太いパイプを築きました。

「わたしがなぜ、ソ連と交流するか分かるかね。共産主義には反対だ。しかし、今の日本は全て米国を向いている。日本海を隔てた向こうにはソ連という大国があるんだ。民間レベルで細くても長いパイプをつなげておかないといけないんだ」

2人に共通しているのは、長大な視野、深い懐、国際感覚、そして、柔道です。

わたしが中国男子の強化を支援した時、「中国に日本が負け

たらどうするんだ」という声がありました。

嘉納師範も松前先生も、きっとこう言うでしょう。

「日本人だろうが、外国人だろうが、柔道を志し、愛し、発展を願う人はみんな門弟だ」

まさに、自他共栄です。

わたしは今、教育、スポーツ、平和のために活動する4回目の人生を生きています。4回目にしてやっと、この精神を行動に移してきたように思います。

本音を言うと、少し達成感がありますが、目指しているのは人生の金メダルです。これからは若い人に道を空け、少し仕事を絞りながら、5回目、6回目の人生の方向を探したいと思っています。あす6月1日、わたしは54歳になります。

〓おわり〓

私は「何のために柔道を続けるのか？」と問われたならば、「柔道・友情・平和」と答えるでしょう。柔道の精神も、オリンピックの精神も、スポーツを通してお互いを理解し世界平和に貢献することを表明しています。最強の競技者になることがスポーツの最終的な目的ではありません。心身のバランスの取れた人間になること、互いに助け合い、平和な社会をつくり支える人間になることが目的なのです。

If I were to be asked why I practice judo, I would answer that it is because I believe judo equals friendship and peace. Both the spirits of judo and the Olympics are based on a desire to attain mutual understanding and world peace. The ultimate goal of sports is not to become the strongest contestant. Instead, it is to foster individuals with balanced minds and bodies who will help those in need and contribute to the development of a peaceful society.

特定非営利活動法人柔道教育ソリダリティー

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1 東海大学 体育学部 山下泰裕研究室

Address : 4-1-1 Kitakaname, Hiratsuka, Kanagawa, Japan, 259-1292

T E L : 0463-58-1211 (EX3524) F A X : 0463-50-2230

Email : judo3524@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

2011年7月1日発行 published 1st of July 2011

発行人：山下泰裕

発行所：特定非営利活動法人柔道教育ソリダリティー